

令和7年度「聖籠町幼児教育推進体制を活用した  
幼保小の架け橋プログラム促進事業」  
有識者会議 次第

日時 令和8年2月26日（木）10時～11時30分

場所 聖籠町役場 大会議室

次第

- 1 開会
- 2 教育長あいさつ
- 3 自己紹介
- 4 説明・協議
  - (1) 令和7年度本事業取組報告
  - (2) 令和8年度の事業計画について
  - (3) ご助言・ご感想・情報交換
  - (4) その他
- 5 閉会

# 令和7年度「聖籠町幼児教育推進体制を活用した 幼保小の架け橋プログラム促進事業」 有識者会議 議事録

令和8年2月26日（木）  
10時～11時30分  
聖籠町役場 大会議室

## 【協議】

（事務局）

本日は、お忙しい中お集まりいただきありがとうございます。今年度の事業報告と次年度の事業予定について、スライドで説明させていただきました。この後まず、委員の皆様方から追加説明や質問、あるいはご助言をいただきたいと思っております。お一人ずつお話しいただき、その後に回答する形にしたいと思います。

（委員）

令和8年度、就学時健診の時に5歳児の全保護者に架け橋プログラムの説明を行うというのは素晴らしいと思えました。よくある子育て講演会みたいなものではなく、今まさに取り組んでいる事業について直接お話しするというのは、非常によいことだと感心しました。これまでは各学校に任せていたのですか？

（事務局）

就学時健診の時に保護者へ講話を行う時間があるのですが、社会教育課を窓口にして各学校の要望に応える形で講師を依頼していました。来年度は、町の全5歳児の保護者に幼児教育センターから直接伝える機会をつくろうと考え、就学時健診の場を活用することにしました。

（委員）

充実した取り組みで素晴らしいと思えました。私からは2点お聞きしたいです。1点目は、私立園への巡回研修についてです。聖籠町には1つの公立園と5つの私立園がありますが、公立園には研修文化が根付いている一方で、私立園の研修に対する意識や質の向上に向けた意欲は、アドバイザーが入ることで具体的にどう高まっていったのかそのプロセスを教えてください。

2点目は小学校についてです。一年間架け橋期コーディネーターを配置して取り組まれましたが、具体的にどんな業務をされ、その結果小学校の先生方の言葉掛けや授業構成にどんな変容や授業改善が見られたのか具体的に教えてください。また、その重要性をどう伝えていくのが良いのか、お考えのところがあったら聞かせください。

（事務局）

初めは、それぞれの園での小さな悩みを丁寧に聞くことから始め、今では園の先生方から悩みや失敗談まで話してくれるようになりました。そのため、「こうしてみたら？」という

具体的な助言ができるようになり、「やってみます」という前向きな言葉に現場が変わってきています。園内研修の時間がなかなか取りづらいところもありますが、「1枚の写真を見て、何が育ってるのかを皆で10分くらい話し合うだけでも力になるよ」という話もしています。法人の先生方からは、「頼りにしている」「自分たちの保育にプラスになっている」という声を聞くようになり、私たち幼児教育センターが受け入れられてきていると思っています。今年度末、各園の良さと課題をまとめて配付したので、来年度はこのポイントを大事にしながらい指導をしていく予定です。

(事務局)

私は、昨年度まで二年間私立園に派遣に行っていました。園の実態としては、研修の時間がなかなか取れず、研修の内容も公立園の状況とは違うものでしたが、自分が今まで経験したことや悩んできたことを伝えていくことで園の先生方もすごく素直に受け入れてくれ、子どもたちのために一生懸命取り組もうとする姿を応援したくなりました。園の先生方のおかげで、私も初心に返り勉強し直しているところです。

(委員)

ありがとうございます。何回ぐらい行かれますか？

(事務局)

月2回ですが、要望があれば行事の前などに「こういう時どうしたらいいですか」という悩みに応じてプラスして訪問しています。幼児教育センターに常勤の職員が配置されたことで、要望があったときにすぐ対応できる場所は今年度の大きな成果と考えられます。

(委員)

ありがとうございます。良好な関係をつくって徐々に徐々に信頼度が高まっていくのだということが伝わってきます。

(事務局)

ありがとうございます。良好な信頼関係は、何回も繰り返し良いところを伝えていくことでつくってきました。こども家庭センターのソーシャルワーカーも、園を同じように定期訪問しています。特別な支援が必要なお子さんをワーカーが見てきて、外部や幼児教育アドバイザーと連携することで私立園からの信頼も得ています。昨日の代表者会議の中で、園長先生から「外部の方が見に来ることに関してストレスを感じず、職員全体や子どもたちも慣れてきた」というお話があり、これが取組の継続の強みだと思っています。

続いて、架け橋期コーディネーターの小学校への配置について説明いたします。町立幼稚園の副園長を低学年部に配置し、生活科と図工を中心にみてもらうことから始めました。5月から比較対象として他の小学校も見て回り、後半は各園のアプローチを見て回るなどやるべきことが増えていきました。最初は、学校の文化に慣れることへの疲れや仕事内容がややはっきりしない部分もありましたが、力を発揮し、昨日の代表者会議では本人が皆さんに「今は達成感があり、たくさんの学びがありました」とお話をされていました。

配置にあたっては、最初に我々センターと校長先生との間で、とにかく小学校と園との共通点や良いところ、共通する声掛けや環境構成を見つけてもらおうと話し合いました。どうしても小学校は時間という枠と教えなければいけないことがあり、ルールが多様であったり、学年が1～6年まで発達段階の違いがあつたりしますが、園と小学校での学びをその都度会議で発表することで、すごく自分の役目の価値を感じ園の先生方に伝える言葉なども変わってきたと思います。小学校の先生は逆に、園の先生が入ってきたことで何のために配置

されたのか架け橋プログラムへの気付きがあり、「園ではこうしていますよ」という助言で生活科の授業に変化をもたらしたり、体育や子どもを集団で動かす時の声掛けが変わってきたりしました。ただ残念なのは、学校全体でどのように共有していくか、あるいは忙しい小学校の現場でどのように定期的に話し合いをもつかについてはなかなか難しかったという言葉がありました。

(事務局)

私も、小学校配置の架け橋期コーディネーターと一緒に他の小学校を回りました。コーディネーターは接続について見取る視点が非常に素晴らしく、こういうところが園からつながっているということを紙面にまとめ、1年生担任と管理職に渡すとともに定期的に意見交換を行いました。1年生担任からは、「そういうふうに見ていただいてありがたい」という声をいただいています。また、コーディネーターは副園長だったので、配置された小学校においては入学して不安だった子の安心感につながったと思います。さらに、とても細かい配慮をしながら子どもたちに接することで、1年生担任からも「自分たちが気付かなかったところを非常によくみてもらえて良かった」という声が聞かれました。コーディネーター自身も「自分が学校に入ることで、子どもたちに安心感を与えられたと思う」と話していて、一年間で自分がやっていることが非常に役に立っているという意識をもったと思います。

(委員)

全国的に子どもの数は減っていますが、支援を必要とする子は増え続けています。聖籠町でも低学年の通級利用や特別支援学級の入級が増えている状況でしょうか。私は、架け橋期における特別支援教育は非常に重要だと思っています。先日、県の方で架け橋の担当者に架け橋期における特別支援教育は重要だと思うので、インクルーシブという意味で架け橋プログラムの中にインクルーシブという言葉や、特別支援教育への対応の重要性ということを文言として入れた方がいいのではないかとということをお話してもらいました。その結果それは一人一人の見取りの中でやりましょうという話になったようですが、しっかりと対応する必要があると思います。聖籠町は、特別支援に関する研修をたくさん入れてくださり、重要だと考えていて素晴らしいと思います。

今年度の特別支援研修会が「事例を通して考える配慮が必要な子どもへの対応についてでしたが、具体的にどのような事例が出たのか分かるようなら教えていただきたいと思います。それから、オンライン研修で「困った行動への対応」とありましたが、具体的にどのような行動を対象にし、どう解決を図ったのか教えていただけますか。さらに、来年度就学時健診の時に、特別支援担当が5歳児の保護者に講話を行う機会を設けるのは素晴らしいと思います。

また、新潟県内で5歳児健診をやっているところは6市町村しかないのですが、やはり就学時健診の時に気付いても学校の対応が間に合わないので、5歳児の時に特性があるかどうかも含めてしっかり健診をすることで特性のある子どもの対応を引き継げるのではないかと思います。当市はようやく今年から5歳児健診をスタートしたのですが、聖籠町は今後5歳児健診を架け橋プログラムや教育福祉と連携する計画があるのかどうか聞かせていただきたいと思います。

(事務局)

今年度の特別支援研修会では、まさにインクルーシブ教育ということで、青陵大学の斉藤先生からお越しいただいて研修をさせていただきました。具体的な例として、動画を見ながら多動のお子さんの動きや支援、周りの子あるいは保育者の視線について具体的なご指導をいただきました。インクルーシブ保育ではありますが、小学校の先生や新発田市の先生から

も申し込みがあり、園と小学校の先生が同じ子に対してどんな支援あるいはどんな準備・環境構成をしていけばよいかというお話でした。

次に、今年度の子育てフォーラムでお話ししたのは、子どもを変えるのではなくて、ストロングポイントを活用する長所活用型で子どもたちの良いところをどう見ていくか、あるいはリフレーミングしながら子どもたちの見方を変えていきませんかという話でした。今年度、法人のこども園から講話の要請があり、園の保護者さんから「こういう子への理解がなかなか進んでいなくて心配です」とか「小学校に行くと、この子が一緒だと荒れてしまうのではないか」という声があり、そんな保護者さんのためにお話させていただきました。

来年度の就学時健診の時の講話内容についても、1つは架け橋プログラムの説明で、つないでいくものは子どもたちの遊びから学びへのつながり。もう1つは、特別支援を視点とした子どもの見方と何をどう伸ばしていくのかについてのお話になる予定です。

また、5歳児健診についてですが、先ほどお話した通り町では以前よりソーシャルワーカーが各園を定期的に訪問しています。そこで見取ったことを保護者とも相談し、相談票が上がってくる前後で小学校とつないで、一緒に児童クラブを見たり入学説明会に行ったりしています。5歳児健診が求めるところよりも早い段階でしっかり取り組みができていますが、5歳児健診は努力義務となっていますので、来年度に町で施行方法について考え令和9年度から実施の予定です。実施の中身はまだ未定ですが、今までやってきた定期的で実際的な見取りと、5歳児健診でのお医者さんの見取りと並行して見ていける強みがあると思います。いい意味での5歳児健診になっていければと思っています。

#### (事務局)

オンライン研修では、困った行動をする子に対する対応方法ということで、実際に担任の先生から悩みをお聞きしました。友達に手が出てしまったり、自分の思うようにいかないと「死ぬ」「殺す」とか「うっせえ」という暴言を吐いてしまったりする子に悩んでいる担任に対して、皆で対処法を考えました。子どもたちは複雑な気持ちをまだ上手に言葉にできず、特にイライラしたり悔しかったりした時は言葉の選択肢が少ないため感情のままに強い言葉を使ってしまうこともあるので、「何か困ったことがあったの？」と本人の気持ちに寄り添って正面から向かうよりも一歩引く対応をしていくこと。気持ちが落ち着くタイミングも大事なので、その子に合ったクールダウンできる場所があるといいこと。そして、子どもたちが落ち着いている時に「そういうのがかっこいいね」と望ましい姿や行動を褒めていくことをお話しました。

#### (事務局)

言葉にならない感情、その背景をどう受け止めていくか、というところは園の先生の方がもともと得意とする分野ですので、そこに少し助言をして考え方・理論を入れてあげたり、小学校の先生も同じですが通常の時に彼らがいい表情・いい感情で動いている時にどれだけ関わられるかを確認したり、「先生方はできていますよ」という後押しをしたりする研修になったと思います。

#### (委員)

特性のあるお子さんの話だったということですね。

#### (事務局)

基本的には、情報が上がってくるケースは卒園間際が多く、特性があり黙っておとなしいお子さんへの気付きは園の先生も少し遅れがちになります。それは仕方ないところですが、1年生になり学習との出会いで発覚してきます。ただそこも、ソーシャルワーカーが常に園に入って遊んだり、見学したり、月2回幼児教育アドバイザーが園に行ったりする

ことで気付いたことを情報交換しながら対応していきます。

(委員)

当市の就学時健診時の教育相談も年々増えてきています。聖籠町でもやはり似たような状況なのかを聞いてみたいと思います。

(事務局)

増加傾向は変わりませんし、文科省が示す教育課程企画特別部会の論点整理で、多様な構成や特性を有する子どもが20%以上になっているというのは感覚的には分かるところもあります。ですから、インクルーシブな話が出てきているなど感じます。

(委員)

説明の中に、「意識」という言葉がいくつか出てきました。「意識改革」「意識を変えなくてはいけない」というのは、どんな意識にしたいのか。幼稚園・保育園の先生方の意識や小学校、特に低学年担任の先生方の意識をこういうふうにしたいというのは具体的にどのような姿なのかを教えていただきたいです。

それともう一つ付随して、先生方の目指す姿は「こういう姿です」ということをどのように見取るのか。アンケートや数値化できるようなものがあるのか。感覚的に良くなったとしているのか、アンケートにこの文言があるから良かったのではないかという評価なのか。数値化しているものがあるのかどうか教えてください。

最後に、事業的にはすごく素晴らしい充実したものができあがってきているなどと思います。当市としてもすごく見習いたいです。どちらかという学校ごとに頑張っていて、市としてもこういう統一した事業があるとよいという思いはありますが、ビルド&ビルドが強調されてはいないか。現場の先生方の負担感が増大してしまうと持続可能ではなくなってしまうということを考え、負担が増えていないかということが気がかりです。

(事務局)

大きく意識改革の部分と、スクラップ&ビルド、現場の負担感についてお答えします。意識改革という部分で、小学校の先生方ではもう減ってきましたが、どうしても1年生をゼロから育てたい、子どもたちはゼロスタートなのだというふうに考えてしまいます。そして、どちらかといえばやはり中学校への学力をみているところは否めません。園での遊びがどのように学びにつながっているかという視点でみると、春の出会い、虫の声、秋の公園、あるいは朝顔の育て方など、園で一生懸命やってきて知っていることがたくさんあるのに「これはこうします」と教え込んでいるところがあります。それは、困らせないような配慮であるかもしれませんが、最初にまず「どんなことをしたいのか?」と聞くことで、学校探検も子どもたちの意欲から始まっていきます。そこが意識改革の重点だと思います。高学年の先生は、1年生のお世話をすることで子どもを育てようとします。でも、1年生はお世話されなくてもできることがたくさんあって、年長さんとして年中さんの手を引くなどたくさんお世話をしてきたわけです。それを奪ってしまわないようにするバランスが、やはり小学校の先生方にはまず必要だと思います。昨日の代表者会議でも、「経験が多い先生ほど、子どもたちをなんとかきちんと1年生にしななければならないというイメージで教え込んでしまうことがあります」という声もありました。園の先生も、どうしても小学校から「座れる子にしてください」「話を聞ける子にしてください」「話し合いで揉めない子にするにはどうしたら?」というプレッシャーの中で、前倒し教育ようになってきている部分もあります。しかし、園の先生がプライドをもって、今の遊びがどういう学びにつながっていくのか考え環境を構成することで遊びが豊かになっていき、主体性が育まれていきます。それがどのように小学校の学びにつながっていくのか、1年生の様子をいっぱい知ってもらうことが意識改革の一

つになると思います。また、小学校の先生は、いろいろやらなければいけない教育がある中で、幼児教育との連携や幼保小接続を優先順位としてどれくらいやっていけるのかが大事になってくると思います。

負担にならないようにどのような工夫をしているかについては、負担感というところで、会議や研修会の種類はここ3年間で増えていますが、回数自体は減っている状況にあります。先生方の出やすい時間帯ということで、園の先生に合わせるとどうしても午睡時間帯になってしまい、小学校の夏休みに合わせると保育園や子ども園は通常保育をしているというところで、それぞれの声を聞きながら進めているところです。具体的にどんなスクラップができているかは、一つ一つ新しい事業を入れる時に代表者会議などで声を聞きながら負担にならないようにやっています。

次に、指導要録を活用した架け橋メッセージについてお話します。これまで指導要録は、園の先生がすごく細かい字でたくさん書かれていました。しかし、小学校入学後にその要録を教員がどれくらいしっかり見ながら指導に活かしているかを考えた時に、園の要録に字数制限をしながら子どもたちが一番伸びたところを書いて、その伸びがそのまま小学校に要録としてではなく架け橋メッセージとしてつながるシステムを作りました。架け橋メッセージは金庫に入れておくものではなく、1年生の担任が子どもや保護者と初めて出会う前にその子の伸びを十分に実感でき、園で頑張ってきたことを把握しながら子どもと関われるというメリットがあります。園の先生、あるいは小学校の先生にとってプラスだと思える事業を継続していきたいと思っています。

評価については、町として非認知能力のここについてという重点化はまだできていない状況ですが、大人の意識に関しては、やはりアンケートを取っていくしかないと思います。来年度の就学時健診の講話の時に、アンケートを実施するようにします。

(事務局)

ビルド&ビルドに関しては、そうならないようにしなければと思っています。例えば、昨年度は7回あった研修会を、今年度は5回に減らしています。一定の成果を収めた研修会をやめたり、指導力向上研修会を特別支援教育研修会に変えたりと、その時に求められている研修会を設定しています。さらに、会議の種類が増えたので、それぞれの会議の回数を減らすなどしてビルド&ビルドにならないことを心掛けています。

(委員)

ありがとうございます。小学校の先生は、入学した子どもたちを赤ちゃん扱いしてしまう傾向がありますが、私が行政にいた時に幼稚園を訪問すると、とても難しい曲を合奏したりしていました。ですが、小学校に入ると「ドアはここですよ」というように対応してしまいます。そのようなギャップは、多分小学校の先生方が保育園や幼稚園に行く機会が非常に少ないからだと思うので、ぜひ行けるように保育園と調整しているところです。そういう意識を変えるのはすごく賛成で、続けてやっていかなければいけないと思っています。

(委員)

オンライン研修の内容と順序の適正についてお聞きしたいと思います。先ほどから特別支援関係の話もされたと思いますが、5月の小学校の運動会が終わった頃に不応症を起こすお子さんもいます。強い衝動性などお子さん自体が困っていると思いますが、ちょうど5月の終わりから6月にかけてそういう様子も見られてきます。それは、通常の指導計画に入っていく時期とほぼ重なるとすると、その前に困った行動に対する対応方法を未然防止という点で先生方がしっかり意識して指導要録も完全に読み込んだ状態で準備しておくことが必須だと思います。ですので、私のところではまず子どもに寄り添うことを第一に考え、来年度に

向けて子どもたちをどう育てていくかを強く意識させるようにしています。新しい出会いをするのは4月なので、この2月・3月・4月をどう組み立てていくかを考えたときに、困った行動をする子への対応ではなくて環境構成などの準備を全学年の先生が身につけられるように意識を高める必要があると考えます。

ですので、特別支援の見方をした時に、このオンライン研修の内容をどう配列すべきなのか。「保護者との信頼関係づくり」や「クレーム対応」についてですが、特に小学校は職員の年齢構成が二極化して、すごく若い職員とかなり経験を積まれた職員が多く、真ん中が少ない状態になっています。特にこの若い職員には、接遇例えば保護者から電話があった時には一旦お切りして要件を聞いて準備をしてから対応すべきことなどもしっかり教えることを考えると、この内容は5月でよいのか。そしてボリュームはどうなのか。確かにどこの職場でも繁忙期があるので、その繁忙期をいかに多忙感をもたせず端的にやるか。むしろ、先生方が自主的に意見交換をしたくなるようなボリュームも大事だと思うので、この一回一回の研修のボリュームはどのくらいの時間が適正なのかということも視点としてもっておくとすごく活かせると思います。

県の架け橋センターがオンライン研修をやられましたが、ある先生の研修は当校の半分くらいの職員が学ばせていただきました。また、オンデマンドにいただいたので、その場になかった職員も「面白いよ」「なんか考え方が変わった」という口コミで8割方が見たようです。先ほど子ども発というお話がありましたが、子ども発でいろいろな問題を解決していくスタンスは先生方に見ると新しく、学校は決められたことやルールに乗っかっていくしかないところがありますが、そういった視点であり方をもう一回見直すといいと思います。

#### (事務局)

オンライン研修は、実際に現場の先生の声をお聞きして年9回行いました。3時半から行っていますが、法人ではまだクラスを見ている状況もあり正直出にくいという声もいただきました。来年度は年9回から6回に減らし、減らした3回分は実際に会って話したいという要望も受け、3～5歳児担任が3時半から1時間位集まることに了解を得ています。オンライン研修では、昨年度より法人の先生方からも積極的に意見が聞かれ、質問も出るようになり、自身の意識の変容に繋がったと思います。また、1月の3歳児のオンライン研修では、「困った行動をする子に対する対応方法」から「進級に向けて大事にしていること」に変更し、それぞれの園の職員が大事にしていきたいことを共有できるようにしました。

オンライン研修のテーマは、前年度に各園から希望を聞き取って決めました。オンライン研修も訪問研修もそうですが、法人も公立の職員も自分の保育を話すことや「自分はこう思ってこうやったんだ」と自分の保育を見直すことが少ないので、そういう機会にしたいと思います。

#### (委員)

今は、みんなどこの職場も時間がすごく厳しいです。当校では、5時間目が終わって2時20分に子どもたちが帰ります。そうやって時間を捻出して、放課後の時間を確保しようとしても結局やることは山ほどあり、職員会議も45分を超えたら絶対やめるなど何かしらの仕掛けをしていかないと難しいです。研修もそうですが、大事な会議だから1時間半というのではなく、密度を濃くしていかないと難しいです。

特にオンラインの場合は、与えられる情報がすごく多くなってしまっていますが、最終的に全部を求めてしまうと講習を受けている人にどこまで狙うかというところがぼやけていく。そう考えた時に、例えば話し合いを30分にするとか、グループワークなら自分は大体15分くらいで終えてしまいます。多く求めても、人によって焦点やニーズも違うので難しいです。

し、どのくらいの時間や情報がいいのか、それが学びにつながり子どもたちに還元することにつながっていかねば意味がないと思います。情報提供者としては、工夫しなければならず悩むところだと思います。

(事務局)

園の職員にしてみると異動が少ない分、横のつながりがすごく刺激的で、できれば直接会ってもっと対話してみたいという気持ちも膨らんでいきます。来年度へ向けて、今いただいた日程や時間について検討させていただきます。ありがとうございました。

(委員)

聖籠町では「次はこれだ」と取り組まれていて、画期的に進んでいっしょるのが素晴らしいと思います。小学校と園で幼児教育リーフレットを共有しながら、例えば重点にするところに丸をつけて「ここに力を入れています」と話し合われているようですが、グループになって話し合われているのか、コーディネーターが入られて直接1年生の先生と話し合われているのか、その具体をお聞かせいただきたいと思います。なぜかという今、小学校と近隣の園と一緒に架け橋カリキュラムを作るように言われて一生懸命やろうとしても、学校はもう到達目標があってこの時間内にやらなければいけないことがあり、カリキュラムを変えるのは文科省から変わらなければ無理だという話が出たり、私立園には方針があるからなかなかそこを変えるのは難しかったりします。私たちは、「遊びが学びだということを子どもが経験していることから捉えます」と伝えるのですが、どうしてもそこが分かっただけでない理解し合えないところであると思います。そこをどんなふうにもコーディネートされてきたのか、ぜひお聞かせいただきたいと思います。

(事務局)

まず、10の姿ですが、到達目標ではなくて伸びゆくものとして考えていただきたいのです。共通の視点で見ていくためには、「この姿を今日は重点にしている」と10の姿を共通項目にすると見通しが立ち、その後の意見交換もしやすくなります。今年度始めた架け橋期担当者会議でも、「やはり全部10の姿につながっているね」という話し合いになり、小学校の先生からは「じゃあ全部なのだ」とまたぼやけてしまうので、小学校には焦点化したいです。例えば、保育動画の中で関わりを見た時に、関わりだけがそこにあるわけではないので、小学校の先生にはやはりギャップがあると思います。そのギャップが薄まっていく感覚が園と小学校の先生方が話し合う面白さであり、中学校の先生方にも来ていただいているので中学校の先生が初めて見た時の「園と小学校が連携し、つながっている」という意見も非常に参考になります。園と小学校だけでやっているところには我々も入りますし、たくさんのグループに分かれて町の園職員が全部ファシリテートするので力量の向上にもつながっていると思います。まずは、意見交換の中で10の姿という共通の視点があることと、最終的には新しい指導要領から見ていけばいいと思います。

(委員)

町のメールで、架け橋のお便りが配られるようになったのはとてもいいと思います。架け橋という言葉が中学校など他でも使われていて見た時に分かりにくいですが、この園小の架け橋は大切なので分かりやすくなるといいなと思います。

あと10年くらい前に、保育園に入る前のお子さん向けに福祉センターで遊び教室をやっていましたが、それは今もやっているんですか？それがあって保育園から小学校につながる時に、特性のある子たちを見つけられたのでとてもいいと思います。

(事務局)

ありがとうございます。遊び教室について少しご説明します。聖籠町では、遊び教室は毎週水曜日に開催されています。保健センターで保健師の方が中心になってやっていますが、もともとは発達に特性課題のあるお子さんを中心に立ち上げられました。今現在は町の子どもの親子遊びを中心に展開している事業で、実際今利用されているお子さんは2人から3人ぐらいで人数が減ってきています。0歳など小さい時から園に通う家庭もどんどん増えてきた関係で、在宅で子育てをしている方が少なくなり本当に利用者が減ってきています。町の事業としては、今後検査として福祉の方が中心になって養育、ペアレントトレーニング、いろいろなものを兼ね備えた保健師さんあるいはソーシャルワーカーが声を掛けてそういう支援が必要な方をお呼びしてということになります。多くのお子さんが0歳から園に行っているのですが、必要であれば園に入っているお子さんやご家庭の方もいます。聖籠町では、以前より12年カリキュラムで子どもたち一人ひとりの特性をみる中で、この架け橋プログラムは0から18歳で重なる場所をしっかりとやっていこうと進めています。

また、聖籠町では幼稚園から小学校、中学校3年生までの12年のつながりを考えた上でさまざまな教育に取り組んでいます。大きく6つの柱立てをしていて、非認知能力、情報活用能力、英語教育などを柱として12年間同じ視点で先生方から見ていただいています。

(委員)

小学校に伝えることはとてもいいと思います。保護者の方に子どもの良いところをできるだけ多く、一言でも伝えてもらえると保護者との関係も良くなると思います。褒めることは先生方も慣れているとは思いますが大変なことなので、管理職の先生たちも職員を褒めていただけたらいいと思います。

(事務局)

ありがとうございます。私立も公立も訪問に行くと先生たちが保育を一生懸命やってくださっていますが、保護者もすごく忙しいので、先生方には実際自分がやってよかったことや子どもと笑顔になれたことを保護者に教えてあげてくださいと話しています。それが先生方と保護者が仲良くなるきっかけにもなるので、「保護者に自分の子どものいいところをみるきっかけづくりをするのも先生方の仕事ですよ」と伝えていきます。特別何かをするのではなく、先生方が保育の中でケラケラ笑えたことやすごいねと思うことをぜひ保護者にも教えてあげて、子どもをみるきっかけづくりをしてほしいというのは各園への指導の一つとしています。

(事務局)

いろいろな先生方がいて異動もありますので、4月の全体研修の中でまず町が基本として大事にしていることを伝え、また校舎長会でも繰り返し伝えていきたいと思っています。

(委員)

ぜひイメージキャラクターを作って、表紙やいろいろなところに独自のものを使ってはどうですか。

(事務局)

町のイラストレーターと相談してみます。ありがとうございます。

(委員)

この事業の成果をどこで見るとかというのは常に問われていて、この事業が成功したかどうかはまずは保護者や地域の人々が「いいね」と言ってくればよいと思います。学校評価や

園評価は、どちらかというと「みんないい」にしてしまっていて、本当にそうなのかなということとはよくあります。でも、評価を受け止めることがやはり次の事業への変化だと思うので、悪いことが分かることは全然悪いことではありません。

また、これまでの活動内容が一覧にまとめられていますが、これは素晴らしくてこうやって全容をまとめるのはとても大事だし、振り返りをするのはとてもよいと思います。事業は成果を出さなければいけないので、どんな事業をやったか、何回やったかなどは最低限求められますが、本来は保護者がどう思うかなど本当に必要な成果をどう示せるかだと思います。数値が難しければ、例えば小学校の先生の声などがあるとさらによいと思います。教員は日々頑張っているのです、成果をどこで見るかは幼児期でもいいし小学校の授業でもいいと思います。中学校も大事だし小学校高学年も大事ですが、少なくとも生活科の授業に絞ってみてもいいのではないかと思います。重きは低学年にあると思うので、生活科の授業を変えましょうというのが良いと思うし、成果もそれで示していいと思います。そして、振り返りと一緒に、やはり常に課題は何かを明確にできるのがいいと思います。全般的には本当に素晴らしくて、言いようがなかったというのが正直なところですが、課題というかこういうところが難しいですねといった意見を言ってもらえるのもすごくいいのではないかと思います。本当に、お疲れ様でした。

(事務局)

委員の皆様、今日は本当にありがとうございました。今ほどの座長からの総括や本日いただいたご意見の中から我々の課題をもう一度踏み込んで考えてみて、来年度の事業に活かしたいと思います。評価については、座長がおっしゃる通り、来年度保護者の皆様に就学時健診の時にどんな内容で何を聞くかを吟味しながら評価を行い、一度評価を行えば経年で見ていくこともできますので、そういうところを考えて進めていきたいと思います。

最後に連絡になりますが、来年度の有識者会議の委員には先ほどご説明させていただいた通り、3市の代表校長も入っていただいて、小学校から変えていこうという意思を確認していきたいと思います。また、教育委員会の指導主事の方からは連絡協議会の方に移っていただいて、教育委員会としてもっと何をしていくことがよいかという話し合いを進めさせていただければと思います。よろしく願いいたします。本日は大変お忙しい中、ありがとうございました。